

不安

校長 武井 正明

いつかは行くのだろうと覚悟はしていた。

娘の披露宴までとうとう十日余りとなった。なんだか胸騒ぎがする。先週はなぜか車のタイヤがパンクした。娘へのラインは、この頃は時間が経ってスタンプで返ってくる。

娘が高校時代、一度だけ1個下の彼氏を家に連れてきたことがある。

何の予告もなく、事前に妻と結託して、いきなり我が家にショーマを連れてきた。

2階から3人の楽しそうな笑い声が漏れてくる。俺は甚だ納得いかない。

私は霧雨の降る庭に一人出て（ここは俺の家だ。早よ帰れ…早よ帰れ）と念じながら、ひたすら雑草を抜いていた。2時間もやっていると、全身びっしょりになった。夕方になって、やっとショーマは帰った。その後、ヤツは二度と来ることはなかった。

あれから随分時間が経った。昨秋遂に、爽やかな青年が、我が家に結婚の挨拶に来た。2月に入籍したが、引っ越しはまだだったので、さほど嫁に行った実感はなかった。

8月「またね～」娘は軽やかに引っ越していった。「またふたりになっちゃったね…」娘の部屋は空っぽ。その辺から、次第に寂しさが忍び寄ってきた。

それから時々娘は帰ってきた。会話の中で、新潟の自宅の方が「帰る」になっていた。

「私たち」の中にオレが入っていないことにも、薄々気づいてはいたさ。

披露宴まで1か月を切ると、娘が、いきなり遠くに行ってしまうような気がしてきた。新潟は近いと周りは言うが、行けばダンナがいるじゃないか。誰が気安く行けるものか。あんなに「パパがいい」と泣き叫んでたのに。もうあの日は、二度と帰ってこない。

新婦入場の音楽と画像は、自分が任された。ふたりで階段を下りてくる。見世物ではない。無事下りられるだろうか。娘の足を引っ張るような真似だけはしたくない。

入場時6秒おきに切り替わる、娘の可愛い盛りの写真を精選した。これに玉置浩二の声を重ねる…。想像するだけで切なくなる。これが「花嫁の父」というものなのか。

娘が信じた人が、何となく自分に似ていると思うのは、親の欲目だろうか。

吉中の、娘をお持ちのお父様方、中学時代の我が娘は「今」しかありません。しっかり目に焼き付けて、娘さんと今しか作れない、悲喜こもごもの思い出をいっぱい作ってください。私は老後、娘との思い出を懐かしみながら生きていくことにします。

皆様にも未来のある日、きっとこんなに嬉しくて、切ない日が来る…かもしれません。

昨日の定期演奏会。多くの来場者の中に愛娘と一緒にいらしていたお父さんを見つけて、思わず昔の自分を思い出しました。もう遠い昔です…。